

第一章 なぜ「記憶」が問題なのか——導入

第一節 「記憶」に注目する理由

なぜ「記憶」がテーマとなるのか。本書を読む際にそのことが問われるかもしれない。あるいは今日の議論において「記憶」概念の意味と目的について長きにわたって思案されてきたなかで、この問いは投げかけられていたのかもしれない。なぜ、またいかにして人は、文学研究者として、文化史家として、あるいは社会学者として、「文化と記憶」に関する研究を行うのか。文化科学¹⁾に蓄積された既成の諸概念——

心性、アイデンティティ、象徴、テキスト、ディイコリス言説——にさらに「記憶」が付け加えられ、そのような問題視角によって社会の形態、歴史過程、文学、芸術、メディアに焦点が当てられるとき、いったい何が獲得されるのだろうか。

「記憶」とは何にもまして他の要素どうしを結びつけるテーマである。今日、実に多様な社会の議論や文化の象徴体系や学問分野が一斉に、記憶の問題に取り組んでいる。二〇・二一世紀転換期において、想起の実践および想起に関する省察はあらゆる文化を包括するような、また学際的かつ国際的な現象となったのだ。

第一に、記憶はあらゆる文化を包括する現象として、文化実践のさまざまな領域で重要な役割を果たしている。たとえば、現代では文学や芸術が想起と忘却を演出している。日刊新聞や週刊新聞では記憶がまさにトップテーマの一つとなっている。記憶はまた（ドイツではビットブルク論争³、歴史家論争³、そしてヴァルザーとブービスの論争以降）政治と世論における激しい議論の対象となった。私たちは、増加しつつある〈遺産産業（Heritage industry）〉を通して記憶に携わり、余暇を過ごす。その影響は週末にまで及んでいる。

第二に、記憶は学際的な現象としてここ二〇年間で「文化科学の主導概念」（A. Assmann 2002）となった。文化と記憶の関係性についての研究に参加しているのは、古代ギリシヤ・ローマ学、宗教学、社会学、政治学、歴史学、文学研究、芸術学、メディア学、教育学、哲学、心理学、神経科学である。

第三に、記憶というテーマに関するそのような取り組みはドイツに限定されるものではまったくなく、国際的な現象である。フランスの文脈では、想起の場に関するピエール・ノラによる構想が登場し、ほどなくして他国に後継者が現れるほどの大きな影響を及ぼした。社会や学問における「メモリー・ブーム（memory-boom）」（Huysen 1995）が認められるのは、アメリカ合衆国、イスラエル、英国、オランダ、南アフリカ、オーストラリア、カナダ、アルゼンチンなどである。

最後に、九・一一アメリカ合衆国同時多発テロのようなトランスナショナルな想起の場が示しているのは、そうした際にナショナルな記憶だけがもはや重要なわけではないということである。宗教、イデオロギー、エスニシティ、世代、そして性は、今日ますますトランスナショナルかつトランスカルチュラルになりつつある体制のなかで、集合的な想起について論じるための中心的な座標となっている。

「記憶」および「想起」は構想として、また実践として、文化的な領域、学問ディシプリン、国民国家を越境していく。そこから次のことも帰結される。記憶論は対話を可能にし、また要請するのだ、と。文化と記憶の関連はどのような学問ディシプリンによっても単独で扱われえない。したがって、「記憶および想起はどの学問も自らのものであると主張することができないような学問横断的な研究領域であるだけでなく、相異なる研究領域での相互作用を可能にし、また必要とするような学際的な研究領域である」（Peters/Ruchatz 2001, S. 9）。その際、記憶というテーマは社会科学、人文科学、自然科学を架橋することを可能にする。今世紀においてそのようなテーマは他にない。

学生や学者にとって最新の記憶研究においてさまざまな観点で重要なことは、「社会的レリバンスと知的挑戦の稀な結合」（Kunsteiner 2002, S. 180）という幸運な事態である。

ここで言う**知的挑戦**とは、記憶というテーマと取り組む際、各学問におけるアクセス方法が一般的な文化理論やメディア理論や隣接する諸科学の手掛かりおよび認識と合流するという事実にあるだけではない。文化的想起の構想によって、エジプトのピラミッドとアメリカ合衆国のエイズ感染症のように、歴史的にも文化的にもお互い距離があるような状況や人為的産物を扱うことも可能になる（前者は J. Assmann 1992、後者は Sturken 1997）。その結果、集合的な想起実践の**社会的レリバン**スは、世論空間においても文化科学的な研究の存在感を高めている（このことは、たとえばここ数年間の『フランクフルター・アルゲマイネ』や『ツァイト』といった新聞の学芸欄や「教養」欄をみればわかる）。「ヨーロッパの虐殺されたユダヤ人のための記念碑」やアルメニアの民族虐殺をめぐる議論⁶が教えてくれるのは、「記憶」というテーマは常に（国際的な）政治、学問、芸術、そして世論の間で繰り広げられる対話とも結びつく、ということである。

第二節 なぜ「記憶」がまさに今日取り上げられるのか

記憶というテーマはいかにしてそのように際立つ存在感をもつようになったのか。第一に、記憶に対する私たちの強迫観念について今日では数多くの説明が広まっているが、それ

をも上回っているのはおびただしい数の記念式典、記憶をめぐる論争、そして想起の歴史に関する論文である。すでに一九九〇年代半ば、マイケル・カンメン (1995, S. 247-51) は、アメリカ合衆国における**記憶をめぐる論争が現代性を帯びている理由**を九つ挙げている。たとえば一九八〇年代以来催されてきた数々の合衆国記念式典、多文化主義、ホロコーストの否定、ベトナム戦争の想起、「記憶産業」の確立、そして冷戦の終焉などがその例である。カンメンの一览において明らかなのは、「記憶」が現代的で文化全体にかかわっており、したがって学際的かつ国際的な現象として一原因に帰することがほとんどできないということだ。カンメン自身は「**説明の多元主義**」(ibid., S. 25) を主張している。第二に、上述の説明に挙げた例のうちドイツの文脈にも当てはまるものが半分にも満たないことが注目される。ドイツもまた一九九〇年代初め以来、社会への普及の点においても学術上の発展分化の点においてもこれまでに例がないといってよいほどの想起ブームを経験している。どの国においてもその国特有の基盤があることは明らかだが、「想起が現代の情念定型にまで昇格」(Radonic-Uhl 2015, S. 8) したことは国際的な現象であった。たいていの場合、「記憶」というテーマの国境を越えたアクチュアリティは、以下のような三つの要素に帰すことができる。

①歴史の変換過程……ホロコーストや第二次世界大戦を体験した世代がやがていなくなるということが国際的に重要である。文化的にシヨアーを想起することにとって、このことは大きな転機を意味している。なぜなら、それによって「コミュニケーション的記憶」(第二章第四節を参照)の枠内において人生体験を口承で伝えていくことも断絶されるからである。アライダ・アスマンとヤン・アスマンが示していたとおり、歴史の証言者が存在しなくなると社会は過去との結びつきに関する二つの別の様式に依存するようになる。一つは学術的・歴史的研究であり、もう一つはメディアに支えられた「文化的記憶」である。加えて言えば、冷戦の終焉によって東側と西側の想起文化という二元構造も掘り起こされた。ソヴィエト連邦の解体後、国民国家および民族に関する多くの記憶が現出したのである。多くの国々——たとえば南アフリカ共和国、アルゼンチン、あるいはチリ——における権威主義的な統治体制から民主主義への移行とともに、**真実和解委員会**が社会における想起作業の中心的な形式となった。最後に、まさに英国の、フランスの、アメリカ合衆国の視角を通して、**脱植民地主義と移民流入の帰結**として明らかに西欧社会の多(想起)文化性の増大が視界に入ってくる。なぜなら、ある社会の民族性および信仰の多様性は伝統と歴史像の多様性をもともなうからである。マイノリティが承認されるためには、彼ら

がどのような過去を辿ってきたのかということに耳を傾けることが必要となる。そのような領域では、記憶は強力な倫理的含意を有する非常に政治的な現象としての輪郭を与えられる(このテーマについては、とりわけ第三章第一節を参照)。

②メディア技術の転換およびメディア作用……メディア技術の領域における変容もまた、国際的な議論において記憶というテーマの存在感が高まっていることの理由としてしばしば挙げられる。今日、デジタル媒体は想定外の大量のデータを記憶できるようになっている。インターネットはある種のグローバルな巨大記録保管庫へと急速に発展を遂げた。**デジタル革命**が私たちに知らしめているのは、メディアによる記憶保存可能性と忘却の危険とのパラドキシカルな連関である。なぜなら、情報がハードディスク上に留まるかぎり、その情報は「死んだ知識」であるからだ。だが、価値あるとされる想起を選択して習得することは、デジタル・データが大量であるためにますます困難になっている。同時に、社会的メディアによって想起の新たな形態が生じてきている。第二に、(疑いなくより伝統的でもあるような) **過去を表象するメディア**が現代における想起チームの表現および駆動力として重要な役割を果たしている。すなわちシヨアーに関する準フィクション映画(たとえばスピルバーグの『シンドラのリスト』1994)、歴史映画、

神話を現代に再現する映画、一般向け歴史ドラマ（ギド・クノップの証言者インタビュから、「一四人——第一次世界大戦の日記（14 – Tagebücher des Ersten Weltkriegs）」（2014）のような国際的に制作されたドキュメンタリー調のドラマ・シリーズに至るまで）、さらには——定評のある記憶媒体である書物の例として——捏造されたホロコースト自伝（Bruchstücke, 1995）が世界的なスキヤンダルとなったいわゆる「ヴェイルコムイルスキー事件」などは、今日における記憶に関するメディア状況を示すいくつかの典型である。上に挙げた例に共通しているのは、真正性を帯びるためにメディアはどのような役割を果たしうるか、またどれほど強力に歴史像を生み出すことに寄与しているか、という問いを投げかけていることである（このテーマに関しては第五章を参照）。

③**精神的および科学的な次元……記憶をめぐる議論はポストモダン歴史哲学およびポスト構造主義の帰結としての側面をも有している。**歴史とは一枚岩的な「集合的単一性」（ラインハート・コゼレック）であり、客観的に所与のものであり、あるいはまた目的論的な進歩の過程であるといったイメージは、現実を構成する表象（再提示）の力や歴史記述の形態性および物語性に関する洞察、そして「歴史の終わり」（フランシス・フクヤマ）、あるいは少なくとも「大きな物語の終焉」（ジャン＝フランソワ・リ

オタール）についての語りによって掘り崩されてしまった。文化科学的な記憶研究は、社会集団がいかにして意味づけの過程を通して過去を絶えず新たに産出し続けているのかと問うことによって、歴史に対する関心をポストモダンのな理論形成の考察に統合する。それに加えて、まさにドイツの文脈において、記憶に関するパラダイムはある学術政治的な次元を開示している。**精神科学における個々の学問ディシプリンが文化科学を拡張し、「想起と記憶」という問題領域にともに焦点を当てることによって、二つの点で現在と過去の文化を社会のシステムのために正当化することが見込まれる。**一方で諸文化科学は、現代の文化遺産を管理する制度として機能する。資料論やテクスト批判のような諸文化科学の方法は、伝承されたものに対して学問的に基礎づけられた取り組みを可能にする。他方で同時に諸文化科学において重要となるのは、想起の（学問的な、政治的な、あるいは審美的な）実践をある理論的かつ観念的な道具立てによって省察し、さまざまな想起文化を比較し、現在進行中の議論に批判的に寄り添うことができるような拠り所である。アライダ・アスマン（2002, S. 45）の言葉を借りれば、「ここで文化科学的な記憶論に課されるのは、社会のおよび政治的な過程に対する反省的な観察と治療的な寄り添い」である。

第三節 「集合的記憶」とは何を意味するのか

記憶論が有する力動性は統合的であるばかりでなく、互いを分離する遠心的なものでもある。なぜなら、ここ数十年間における「メモリー・ブーム」の結果として、今日の私たちはその異同がまったくはつきりしない数多くの概念と構想に關係しているということが確認されるからである。一九二〇年代から現在に至るまでの重要な概念をおおまかに編年史的に追ってみると、集合的記憶 (mémoire collective)、『ムネモシユネ (Mnemosyne)』、『記憶の場 (lieux de mémoire)』、『文化的記憶 (Kulturelles Gedächtnis)』および「コミュニケーシヨンの記憶 (Kommunikatives Gedächtnis)』、『社会的記憶 (social memory)』、『想起文化 (Erinnerungskulturen)』、『社会的忘却 (soziales Vergessen)』、『そして異文化間記憶 (transcultural memory)』などが挙げられる。文化科学における記憶研究は、今日では「パラダイム不在の、異学間間の中心を欠いた企て」(Olick/Robins 1998, S. 106) となっており、したがって「それぞれの学問ディシプリン間で考察対象が非常に似通っているとはいえその方法や問題設定が相互にかけ離れている可能性があること」の典型例」(Petras/Ruchatz 2001, S. 5) である。

記憶に関する諸構想が異なっていること、またおそらく考察対象が同一と思われるのにその把握方法が学問ディシプリンによって異なっていることは、今日における記憶研究にとつての最重要課題の一つを示してくれている。記憶研究が応じなければならぬもう一つの課題は、記憶研究が同一の現象に取り組んでいるというふうな考え方に対する広く知れ渡った批判である。なぜなら、多くの懐疑者たちにとって、記憶概念はそれとは反対にきわめて多様な諸対象を無理矢理に同一化してしまうとみなされるからである。個人の意識過程、神話、建築物、記念碑論争、自伝、親族における写真の考察は、ほんとうに「集合的記憶」という主導概念のもとで同類のものとして集約してしまうことができるのか、いやそもそもそうしてしまうことが許されるのかどうか。その際の問題は「記憶」概念を許容しがたいほどに拡張することにあるのではないか。「記憶」は「何でもありのカテゴリ (catch-all category)」(vgl. Zeiler 1995, S. 235) になつてしまふ危険性がないか。

本書はどちらかといえば楽観主義的な視座に立つ。記憶に関する考察を分解しようとする遠心的な力にもかかわらず、また記憶研究における境界の消滅という危険にもかかわらず、「文化」と「記憶」の関連に取り組むことには意義がある。なぜなら、想起文化科学の研究は「以前には不一致しか認められなかった地点において新たな問題連関を可視化

する」(A. Assmann 2002: S. 40) 卓越した戦略であるからだ。その際、記憶はまずはさまざまな(言語の、社会の、歴史の、国民国家の、あるいは学術の) 文脈において多様に構成される「まとまりのない構造」(Pehes/Richarz 2001, S. 13)として把握される(したがって、本書の重要な目標の一つはさまざまな記憶論の由来や相違および連関を指摘し、一つの範型のうちに統合することである。第二章第四節を参照)。

この入門書は広義の「集合的記憶」概念を基盤としている。この「集合的記憶」概念のもとに、まったく異なる諸現象(神経回路接続、日常言語、伝統など)が統合される。暫定的な定義は次のようになる。「集合的記憶」は、生物的な、心理的な、メディア的な、そして社会的な諸現象の上位概念であり、そうした諸現象の意味は過去、現在、未来が文化のそれぞれの文脈に応じて相互に作用し合うことによって獲得される。

記憶概念をそのように拡張して使用することは、文化科学的な記憶研究の生みの親であるモーリス・アルヴァックスにまで遡るが、それにとどまらない。そうした概念の使用拡張は、まさに文化科学的な精密さへの関心から正当化されるのである。なぜなら、「集合的記憶」という複合体全体のうち記憶概念の使用が位置づけられることによって初めて、想起文化における個々の現象の間にある関連性が理解されるからである。ドイツにおいて今でもなお重要とみなされている

想起文化の状況を事例として挙げておこう。「第三帝国」に関する祖父(および曾祖父)の自伝上の想起、学問的な歴史記述、歴史に関する授業の教科課程、今日の孫世代(および曾孫世代)におけるナチズムの過去に関するイメージ、いわゆる「帝国水晶の夜」の五〇年後に催された一九八八年のイェンニンガー講演のような追悼式およびそれにまつわるスキャンダル、ベルリンの帝国議会議事堂前におけるペーター・アイゼンマンの石碑群「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」のような警告碑、「躓きの石」と呼ばれるモニュメントを用いた地域の取り組み、ケルテース・イムレの『運命ではなく』(1996)のような文学作品やオリヴァー・ヒルシュビーゲルの『ヒトラー 最期の12日間』(2004)のような劇映画の意味、あるいはヴァルター・メアスの『アドルフ——総統地下壕 (Adolf - Der Bonker)』(2006)の意味。これらの現象を個別に分離して考察することなどはしない。個人的な想起、歴史記述あるいはフィクションの文章を集合的記憶から外して考えようとする者は(それぞれのためにすでに概念があるのだからという理由で、あるいはそれらすべてを包摂する超理論など必要ないという理由で、または自らの学問ディシプリンの正当性が脅かされるのではないかという理由で)、以上で挙げた諸現象を結ぶ接続線を認識することなどできないであろう。

「集合的記憶」は「歴史」の代案でもなければ「歴史」の

「別物」でもない。それはまた、個人的な生の想起の対極でもない。「集合的記憶」とはそうしたさまざまな文化的現象が生じる文脈全体である。誤解や混同、また批判者たちがシヤドーボクシングを繰り返す傾向を何としても予防しなければならぬが、そのためには集合的記憶の構想をまずは非常に広く設定しておかねばならない。もっとも、その後での「広義の「集合的記憶」の」領域に概念上および構想上の分化を施すことが不可欠となる。そうした分化を進展させることは——国際的な対話が問題となる場合にはまさにそうだが——記憶研究の最も喫緊の課題の一つである。この入門書は記憶概念に関する語句の使用および換喩や隠喩の使用を分類し、集合的記憶のさまざまな体系や様式を区別し、さらには想起文化に関する一連の多様な次元、シンボル体系、メディアおよび形式に注目することによって、そうした企てに貢献しようとするものである（このことについては第四章を参照）。

第四節 重要なのは記憶、想起、あるいは忘却か

〔節題にある〕この問いの立て方はもちろん誤っている。記憶、想起、忘却という三つの概念のいずれも、文化科学研究には欠かすことができないし、また欠かすべきではないであ

ろう。もっともそうした概念の一つもしくは二つを優先するような学問的文脈というものはある。たとえば、アライダ・アスマン（1999）およびヤン・アスマン（1992）は文化的な〈記憶〉を語り、エレナ・エスポジート（2002）は社会的忘却を強調し、また「想起文化」についての特別研究領域（ギーセン大学 1997-2009）にかかわる学者たちは、〈想起〉の力動性および複数性に専念している（第二章第五節を参照）。想起の力動性については以下の文献も参照のこと。Bav Crowe/Spitzer 1999; Irwin-Zarecka 2004; Rigney 2005）。

記憶、想起、そして忘却は、個人の次元においても、また集合的な次元においても、相互に関連し合っている（個体心理学的な概念を集合的な次元に比喩的に引き写すことの意味および無意味については、第四章第一節を参照）。想起する（Erinnern）とは一つの過程であり、想起（Erinnerungen）とはその結果である。記憶（Gedächtnis）とは一つの能力あるいは可変的な構造であるということとは、さまざまな専門領域の境界を超えて広く一致がみられる。もっとも、記憶とは観察不可能なものである。ただ具体的に完全に特定の社会文化的な文脈のもとに置かれた想起活動の調査によってのみ、記憶の性質および機能の仕方についての仮説を導くことができる。本書のタイトルは以上のような区別に基づいたものである。つまり、集合的記憶とは文化科学的な関心が向けられる焦点であり、想起文化とは文化科学的の調査対象である。

概念定義上の相違にもかかわらず、想起することに関しては、広く認められている二つの中心的なメルクマールが挙げられる。すなわち、想起が**現在と関連**していること、そして**構築的な性質**を帯びていることである。想起は過去に認知したことの客観的な複写でもなければ、ましてや過去のリアリティの複写でもない。想起とは、主観的で、きわめて選択的で、それが引き起こされる状況に左右されるような再構成的活動である。想起することとは、手持ちのデータを組み合わせる (re-member) という、現在において遂行される操作である。過去の数あるバージョンは、想起が引き起こされるたびに、つまり現在が変化するのに応じて変容する (たとえば初めてのデータの様子と意味について、あなたの想起が時間の経過とともに変化しているのを確認してみてもよい)。個人的な、また集合的な想起は、それゆえけつして過去の鏡像ではないが、現在において想起する者たちの要求および利害に対する重要な徴候ではある。想起文化科学の研究が関心を向けるのは、そのときどきにおいて想起された過去に対してではなく、まず想起する現在に対してである。

想起することと忘却することは記憶という一つの現象の裏表——あるいは相異なる過程——である。(社会的な) **忘却**は(文化的な)想起の前提である。なぜなら、(完全な想起 (total recall))、つまり過去のあらゆる出来事に関する穴のない想起などというものがあるとすれば、個人にとっても、ま

た集団や社会にとっても、それは完全な忘却に等しいにちがいない。このことは一八七一年にニーチェが『生に対する歴史の利害について』における歴史主義批判で強調していたことである。忘却は記憶のエコノミーにとって、またスキーマを形成する能力にとって必要なことである(このことについては第四章第六節を参照)。

第五節 本書の課題および構成

この入門書における対象は**文化と記憶の関連**である。個人の次元においても、また集合的な次元においても、文化と記憶のそうした関連は有効である。個々人は常に社会文化的な文脈のもとで想起を行う。そして文化は、象徴、メディア、相互作用、制度を通じて『集合的記憶』を確立することで初めて生起する。本書で問題にしたいのは、個人と集団の両次元であり、またそれらの次元が何重にも浸透し合うことである。その際、関心を寄せる学生や研究者にとって、目下のところまさに迷路のごとく分岐してしまっている研究分野への入り口を見つけ出すことができるような方法を用いることにする。

本書は文化的想起の歴史や一般的な(また一九〇〇年頃まで隆盛していた哲学的な)記憶に関する省察を要約して

再述しようとするものではない。とはいえ両者はときおり本書のうちに入り込んでくる。事実史としての想起の歴史は五〇〇年以上にもわたる。ヤン・アスマンが示したとおり、そうした歴史はエジプトのピラミッドにまで遡る。文化的記憶の歴史に関する見渡しのよい概観については、ヤン・アスマン (J. Assmann 1992) およびアライダ・アスマン (A. Assmann 1999) の著作を併せ読むことで提供される。さまざまな歴史的な想起文化については、ギーセン大学における特別研究領域の著作シリーズ (一九九七年からギュンター・エスターレによって編集された『想起の形式 (Formen der Erinnerung)』) で詳細に示されている。記憶についての省察の歴史もまた古くに遡り、西洋文化圏においてはプラトンやアリストテレスにまで至る。記憶の場や機能の在り方に関する問題に多大な貢献を果たした記憶の哲学者たちや心理学の原初形態を生み出した思想家たちの長大な一覧を提示するとすれば、たとえば A・アウグスティヌス、G・ブルノー、M・モンテーニュ、J・ロック、D・ヒューム、I・カント、G・W・F・ヘーゲル、Fr・ニーチェ、H・ベルクソン、S・フロイト、E・フッサールの名が挙げられよう。記憶に関する省察の歴史を扱うテキスト集や論述で大いに推薦されるべきものがすでに公にされてくる (Harth 1991; Fleckner 1995; Draaisma 1999 を参照)。

そのようなことの代わりに本書の各章で中心に位置して

るのは、文化的記憶の文化科学的な諸理論 (およびそうした諸理論が提供する概念、構想、そして方法) である。一九二〇年以降にそのような理論がそれぞれのように構想され、また論じられてきたのか、ということが提示される。本書が扱うのは、社会文化的な文脈において想起することの構成性、集合性、記号化および媒体化を認識し問題として取り上げる理論である。近代的な文化理解の生起と集合的な記憶の理論構築は、相互に密接に連結している。両者、つまり文化と記憶は、「人間による自己生産的な意味の織物」(M・ヴェーバー) として把握される。想起は「文化の記号論的なメカニズム」(Juri Lotman/Boris Uspenski) における構造化のための要素である。それゆえ、文化科学的な記憶研究のさまざまな試みに共通しているのは、それらが記憶を文化的な過程の前提、構成要素、そして (もしくは) 生産物と捉えていることである。

この入門書は文化科学 (における記憶に関する理論) について詳細に伝えるとともに、必然的に (記憶) という現象の探究における学際的かつ国際的な次元にも焦点を当てる。実際に、文化と記憶に関する取り組みは専門領域の境界や国境を随分と以前から乗り越えてきた。記憶研究に関する国際的および学際的な対話の機関誌として挙げられるのは、『歴史と理論 (History & Theory)』(1960-) 『記憶と歴史 (Memory & History)』(1989)、ソール・フリードランド

一編)、『歴史再考 (Rethinking History)』(1997)である。主要な著作シリーズとしては、『記憶とナラティヴ (Studies in Memory and Narrative)』(1998、最初はラウトレッジ社から、後にトランザクシオン社から刊行)、『文化的想起の現在 (Cultural Memory in the Present)』(1998、スタンフォード大学出版局)、ミック・バル／ハント・ド・ヴリース編)、『メディアと文化的想起 (Media and Cultural Memory / Medien und kulturelle Erinnerung)』(2004、グレイター社)、アストリッド・エアル／アンスガー・ニュニンング編)、『想起文化 (Erinnerungskulturen / Memory Culture)』(2012、トランスクリプト社、アライダ・アスマン／ビルギット・シュヴェリンク編)がある。

アンドリュウ・ホスキンスによって二〇〇八年に創設された雑誌『メモリー・スタディーズ (Memory Studies)』(セージ社)は、そのような新たな研究領域に対して最初に「メモリー・スタディーズ」という名称を与え、時の経過とともに国際的に浸透させるに至った。現在、この雑誌は「集合的記憶」に関する国際的および学際的な対話の中心的なプラットフォームとみなされている。二〇〇九年からは、同名の著作シリーズがP・マクミラン社から刊行されている。メモリー・スタディーズは今日では学術上の専門分野として確立されており、その範囲はほぼ世界規模といつてよい。二〇・二一世紀転換期以降、記憶研究に関する相当数の機関が設立

された。また、メモリー・スタディーズの領域における学士・修士課程が構想された。学術的なハンドブックや事典によって記憶研究の多様な方向性が示されている (vgl. Peheș/Ruchatz 2001; Ertl/Nünning 2008; Gudenus/Eichenberg/Welzer 2010; Radstone/Schwarz 2010; Keightley/Pickering 2013; Katago 2014; Nikulin 2015; Toral/Hagen 2016)。また、アンソロジーによってこの分野の基本的テキストが集約して提示されている (vgl. Rossington/Whitehead et al. 2007; Olick et al. 2010)。記憶研究の入門書の数は継続的に増え続けている (vgl. Misztal 2003; Cubitt 2007; Peheș 2008; Whitehead 2009)。

本書は文化科学における記憶研究——その歴史および今日における発展、また国際的かつ学際的な諸次元——について一つの鳥瞰図を提供するものである。その中核にあるのは、ドイツ、フランス、オランダ、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、英国において発展してきた記憶に関する諸構想である(そのように西洋世界に焦点を当てるのは今なお国際的な議論がそのような傾向にあるからであるが、筆者の語学能力の制約にも起因している。とはいえ、部分的にはアフリカ、南アメリカ、そしてアジアの研究成果も取り入れている)。今日において最も明瞭なかたちでメモリー・スタディーズの分野に貢献し、またそれゆえに本書において子細な点で評価される諸学問として、歴史学や諸社会科学、哲学、文学研究、心理学、メディア学が取り上げられる。

この入門書では、第一に文化科学的な記憶研究の歴史的な次元を、第二にその理論的な次元を提示する。第三に注目するのは、メディアを通じた記憶の構成についてである。第四の、そして本書における中心的な関心事は、集合的記憶の強力なメディアとしての文学である。

第二章では、二〇世紀における集合的記憶の重要な諸理論（モリス・アルヴァックスの「集合的記憶」から現代における「想起文化」研究に至るまで）を紹介し、それによって文化科学的な記憶研究の歴史およびその基礎の概略を示す。

この研究領域の分化の度合いがきわめて高いことから、第三章では**学問分野**（歴史学、諸社会科学、文学研究、そして心理学）**ごとの具体的な記憶論**を概観する。その際、学際的なネットワーク化の手掛かりおよび可能性については常に視野に捉えておく。

第四章では、集合的記憶および想起文化の**文化記号的モデル**を構想する。多次元からなる記号システムとしての想起文化を主要な問題視角としつつ、既成の諸構想を区別しな

から（「忘却」から「トラベリング・メモリー」に至るまでの）記憶研究の鍵概念について議論する。

第五章においては、文化的想起に与る**メディアの重要な役割**を考察する。そこで示されるのは、いかにして記憶がメディアを通して構成されてきたか（構成されるのか）ということであり、ある記憶のメディアがどのような要素によって構成されているのかということであり、そのようなメディアが想起文化においていかに多様に機能するのかということである。想起文化における個別のメディア（映画、写真）を事例としてその意味を照射し、想起に関するメディアの論理（アレメデイエーションおよびリメデイエーション）を提示する。

第六章および第七章では、「想起」歴史的な文学研究の基本理論を構想する。**文学を集合的記憶のメディアとして**みなし、想起文化（および想起文化が有する「集合的記憶のレトリック」）にかかわる具体的なテキストを分析するためのいくつかの範疇を示す。